

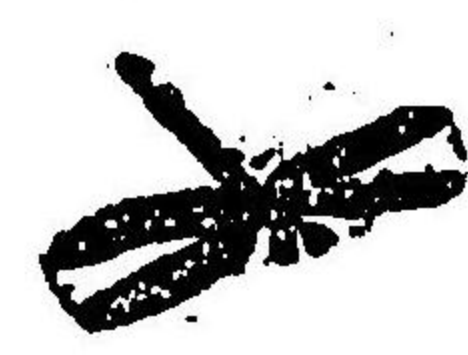


うムんす。此麼お金なんぞ百萬兩積んだつて厭
てす』

『そうかいや私が悪かつた。お前の心持を知らぬ私でもなかつたつけ—』

玉代の凭うした氣前に、社長の寵愛は愈々深くなるばかりであつた。

この事であつて、二日許り後のことであつた。吉原時代に關係のあつた榮三郎（今の梅幸）か



ら意外にも或師匠を介して女房に貰ひ受け度いとの申込に接した。そつとして置いた古傷に觸つたやうな心になつた。

其頃は有名な洗髪のお妻が家橋（今の羽左衛門）と互に深く思ひ思はれてゐた頃で、此方は玉代と榮三郎向ふはお妻と家橋此四人は始終番離れず組み合つては共に遊んで居た。そのお妻と家橋との仲が玉代の吉原を去る頃



迄は續かなかつた。家橋をお鯉に奪はれて了つた妻は甚麼に口惜しがつて騒いだであつたらう。其夜も妻は五兩一步の高利の金を千五百圓借り出して烏森の榊田屋の女將お筆を連れ出し、訥升(今の宗十郎)を買つて、一晚にかいくれ費ひ果して了つた。

玉代は今有繋に此も妻と家橋とのことを事新らしく胸に泛かべて見ぬ譯には行かなかつた。然し榮三郎は可懐かつた。折角の申込をつれ



なく退けて了ふにも忍びなかつた。恰度此時社長夫人が會ひ度いと云つて寄越した。

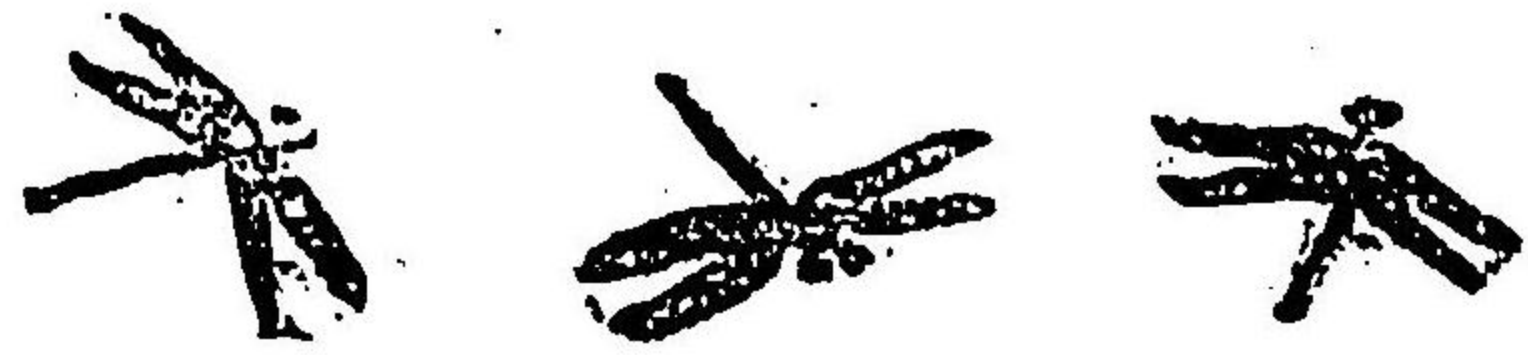
これを聞いた玉代はもう躊躇はしなかつた。私は藝人などの女房になるのは厭ですから、慙う云つて師匠の處へ辭つて了つた。自分の氣立が氣に入つたと云つて逢はうと云ふ、その奥さんの氣立が私も氣に入つた。今更淨氣をして、旦那を役者に見替へたと云はれては、其奥さんの前に、ど



うして合はせる顔があらう。玉代は慙う思ひ決
めずには居られなかつた。

日は流れるやうに暮れて行つた。

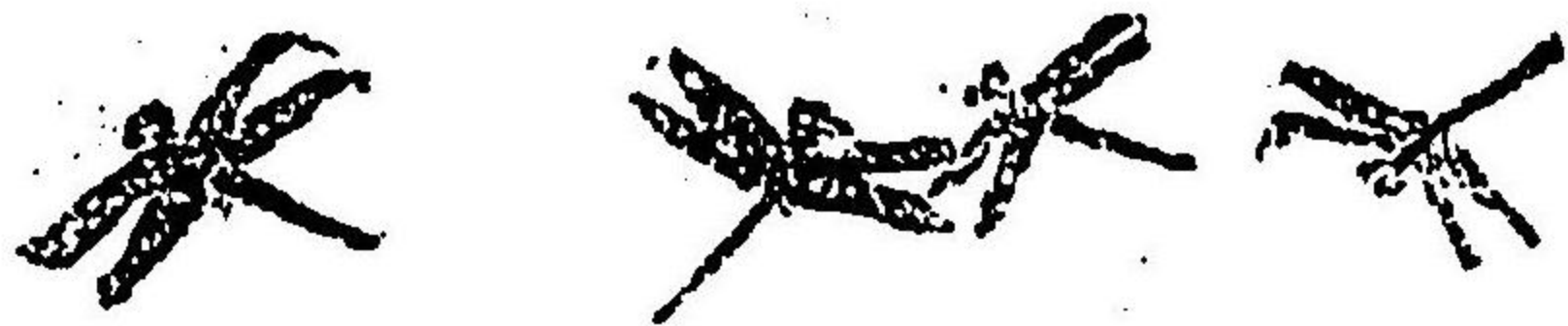
玉代が二十の年の暮のことであつた。赤門出
のさる辯護士が、或る處で玉代の寫眞を見て、欲し
くて堪まらず、無理に貰つて歸つて書齋に銚りつ
け乍ら世話のない手活の花と朝夕眺め暮して悦
に入つてゐた。一夕圖らずも社長と官房長が落



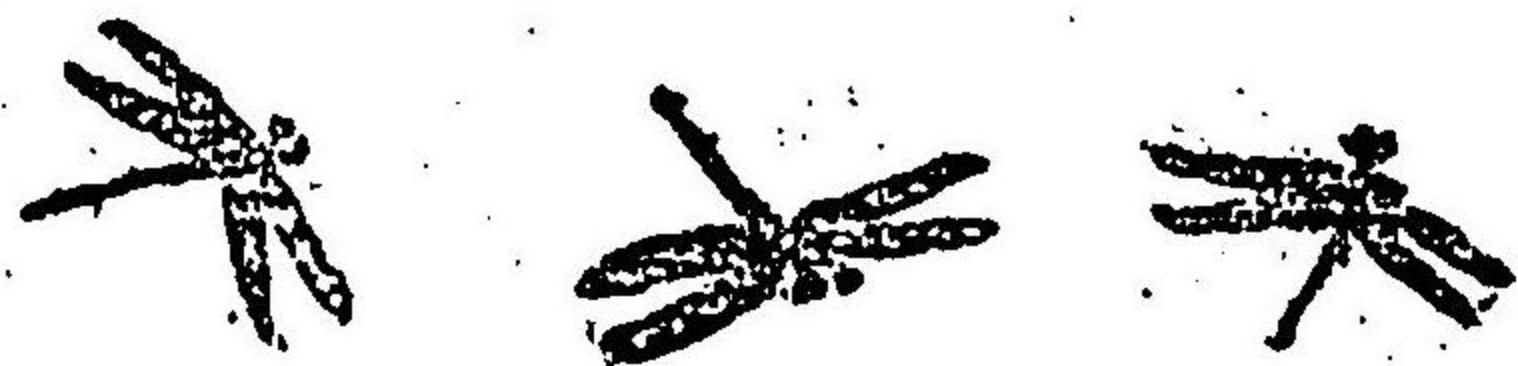
ち合ひ眼の前に銚りつけられてある玉代の寫眞
から、遂話に花が咲いて互に當こするやら皮肉や
らを云ひ出して、苦り切つた揚句官房長は遂に慙
う云ひ出した。

「併し君、藝者は天下の共有物さ。君が馴染に
するのを僕は苦情を云はんから、僕がまた情人に
するのを妨げないで呉れ給へ」

慙う云つた處から社長は憤り出して了つた。
果ては穩かならぬ形勢となつたのを、辯護士は仲



に入つて引わけ、其場は無事に済んだもの、社長の胸は此時より獨り歎まらなくなつた。
 社長は或時玉代を呼んで、自分が多少共是れ迄世話をした女を共有物だと云はれては聞き捨てにはならぬ。此上は寧ろ落籍せ度いと思ふ。慥う云ふ意味を繰返し話した。
 これを聞き知つた官房長は、社長に負けたと云はれては男が立たぬ。社長の出す倍額の身代金を出すから——。慥う云つて奇越した。



玉代の心は迷はなかつた。
 翌くる日玉代は官房長を訪ねた。實は私は貴郎に惚れて居た。男前と云ひ氣立と云ひ金放れと云ひ何一つ申分のない貴郎に落籍されると云ふのは私に取つてどれ程の悦びだか知れない。けれども私は社長には云ひ盡せぬ恩義を受けてゐる。譬ひ一萬圓積んでも、二萬圓積んでも私は此恩義を捨て、願ひ譯には行かない。くだく敷は云はない。只此切なる私の心を酌んで諦め



登くる二十一歳の正月玉代は愈々生れ變るべき
時が来た。
松の内の賑ひを名残に身洗ひを済した玉代は

智識の坂路

十三



て下さり。悠ゆ々ゆつて玉代はハラク涙なみだを齧かし
た。



八官町小林時計店前に、昨日に変わるも圍ひ者のも
 琴となつて、『佐川』と小さく忍びの標札が見越
 しの松の風情ある船板扉の門口に張り出された。
 堀田子爵から送られたも梅ちやんと呼ぶ狎と、
 それに下女と自分との三人暮し、静かな變化のな
 い日が續き出した。
 周囲の静謐は、日に日に意味深くも琴の身に迫
 つて来た。心の眼は胸の底から頭を擡げて、新ら
 しい日の来たのを繰り返しく囁き出した。

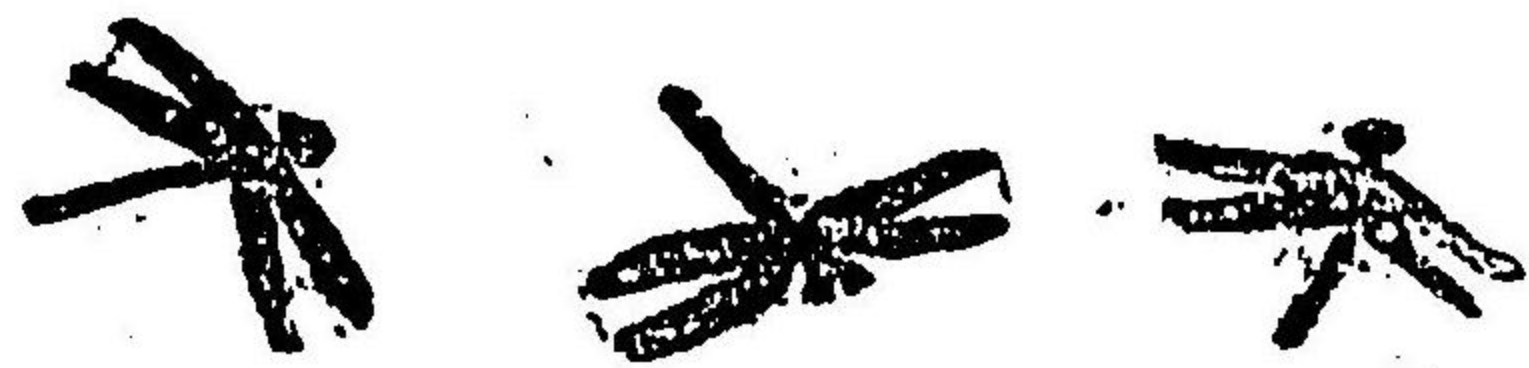


憊うしたも琴の前には、新らしい世界がどんな
 に珍らしく展けたことであらう。高く高く澄ん
 だ世界は、如何に玉代の新らしき心の眼を歎てし
 めたことであらう。
 元はと云へば馬術弓術水練まで、一通り名さへ
 取つた程の暴れ者のも琴も、今は只過ぎた永い間
 の張り詰めた心が俄かになつとりと柔かに、春の
 水の様に溶けて来るやうに感じた。
 只譯もなく心が惆悵しかつた。酒を止め、骨牌



を止め……あらゆる今迄の經て來た恣な奔放な生活を悉り洗ひ盡して了つたお琴は、全く生れ變つて、眼を開き掛けたのであつた。茶の湯も、活け花も、琴も……と憊う云つて、お琴は名こそあ圖ひ者ではあつたが、心は日にく澄んだ高い世界に移つて行つた。

舊い衣を脱こう。憊う思ひ込んだお琴は、藝者や茶屋者等の交際を一切斷つて、ひたすら名門の夫人嬖妾に近附きを求めた。



新らしい智識を求むるに切なる心は、遂にお琴を、一ツ橋の女子職業學校に連れ出した。この學校生活は更にお琴を明るい世界に運ばずには居られなかつた。

年は明けて暮れた。

明治三十三年の十一月末、お琴は單身社長に從つて、越後の長岡として上野を發つた。雪は車窓を打つた。眼の前に展けて來る信濃



の高原は白く續いて、吹く風は雪を捲いた。淺間の裾を登り切ると、黒ずむ千曲川が緩く流れてゐた。

北國に漂泊ひ行く感じは、群々とお琴の胸に迫つた。来た。伴れて来た。狎は、一息々々と迫り来る寒さに、時々細い聲を出して啼いた。

お琴は黙つて、玻璃窓に凭れ乍ら、しよんぼりと目を閉つてゐた。

社長が新たに起した石油起業會社を監督する



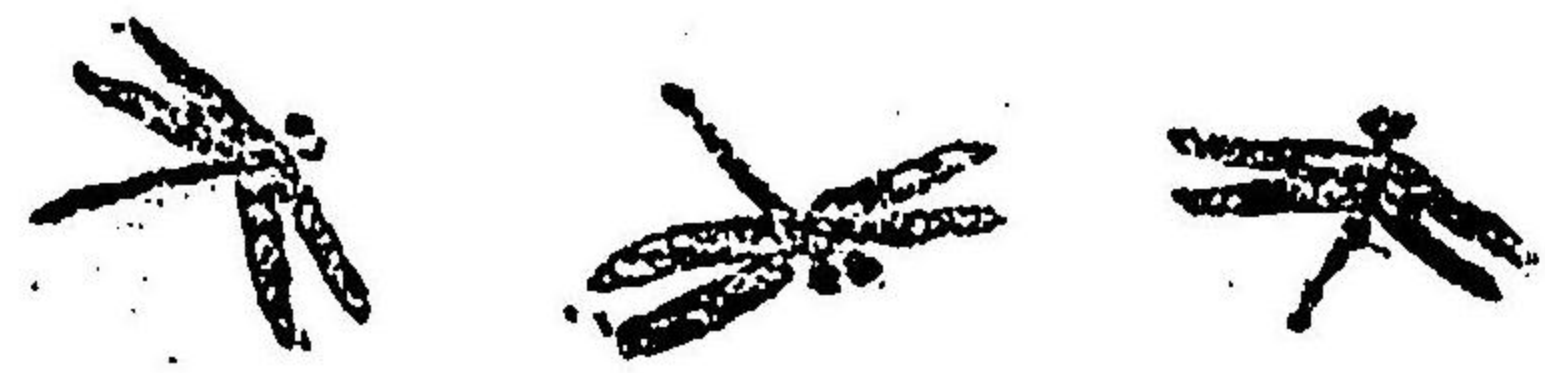
爲に、長岡へ移住と決めた時、お琴は心からその同伴を悦んだのであつたが、今愆うして肅索たる北國に足を入れて見ると、今更に住み馴れた都の空に心惹かれて、只妙に心細く思はれてならなかつた。努めて此心と戦はねばならぬ。愆う思つたお琴は、話しに忘れ去らうと思つて、強いて社長に話掛けた。

長岡の生活は大なる革命であつた。



入りては忠實な下婢となり出ては従順な賢夫
人とならねばならなかつた。周囲の空気は、お琴
を頭から壓しつけて止まなかつた。

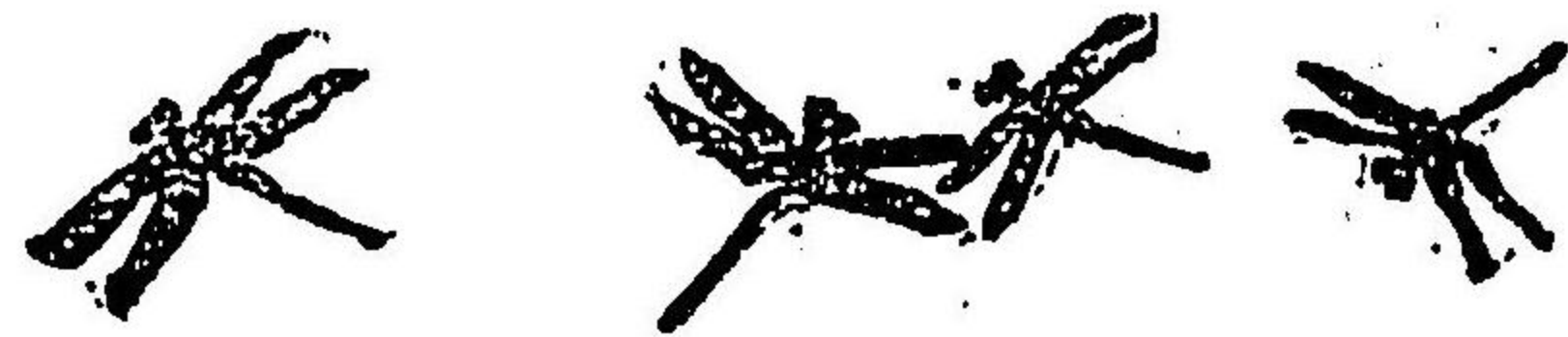
着るものと云つては、どんな資産家の妻君でも
木綿着物を着けてゐた。自ら女中の先に立つて
働いて居た。慙うした長岡の家庭を見せられた
お琴は、どんなに自分の生活を恥しく思つたらう。
初めお琴は東京と同じ氣で紋附の縮緬の羽織を
着込んで居た。それを見た町の婦人達は、「彼の



奥さんは毎日お葬式に行くのかしら』かう云つ
て嘲笑つた。この囁は甚麽にも琴の心の革命を
喚び起したらう。

お琴は直に縮緬の紋附の羽織を捨て、了つて
双子の筒袖を身に着けた。

笑はれては口惜しい。人のする事に自分一人
が出来ぬと云ふことはない。慙うした考は、お琴
を菜や大根の野菜物の畑造りの手傳に送連れて
行つた。



長岡の婦人には只質朴と勤勉との四字より外にはなかつた。芝居や物見遊山や……それ等の歡樂を夢にも望もうと企てる人としてはなかつた。此長岡の町に住んで慙うした勤めが出来ぬ位の者は宿場女郎かたるま上りの者として誰一人交際人もない。

お琴の此劇變は、どんなに長岡人を驚かしたてあつたらう。

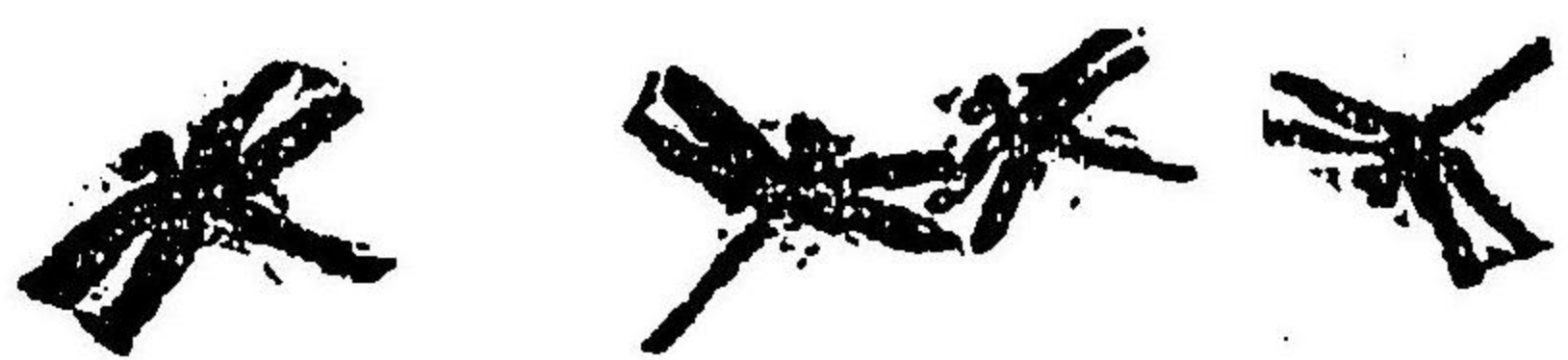
お琴の革命は慙うした外部生活にのみ止まつ



たのではなかつた。インテリライに迄深く立ち入つて洗ひさらひ、性格をも改造させねば止まなかつた。

雪の夜の徒然に社長は炬燵にあたり乍ら、人の道、婦女の道を渾々と説き聞かせた。お琴は只巨大な父の前にも立たせられてゐる様な氣がして、譯もなく其訓に耳を傾けさせられた。

「今日は此本を読んで置け」
慙う云つて社長は毎朝の出勤の出掛けに、倫理



や、哲學の書籍を、お琴の前に置いて行つた。
固よりお琴には、憊うした書籍の意味の解らう
等は無かつた。けれども、嚴格の社長に叱られて
はと思つて、無理にも暗誦した。
お琴の荷は重かつた。
どんなに喘ぎ／＼此重荷を脊負つて峻い智識
の坂路をたどつたであらう。

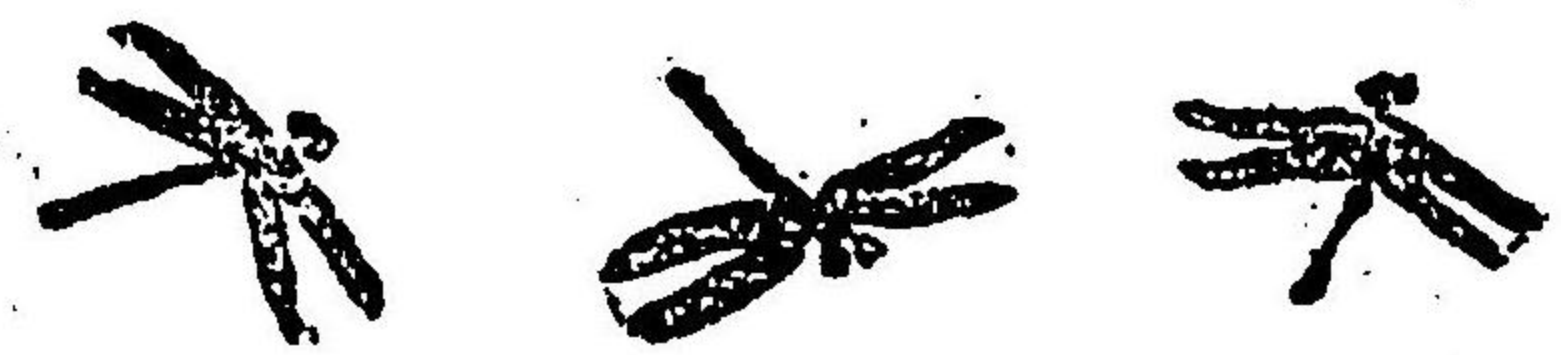
憊うした生活が、一年と過ぎ、二年と経つた。然



し年は空しく過ぎ越してはゐなかつた。お琴は
今迄に、遂ぞ知らなかつた新らしい世界に導かれ
て來てゐた。

人の道とは何。女の道とは何。これを知つた
お琴の心は今更に自己の境遇を顧み出した。今更
更に自己の生活を痛感させられた。

不安と懷疑と、それが如何にも大きな響を傳へ
て、お琴の心の中を駆け廻つた。
何よりも先づ、自己の根底から築きなほさねば



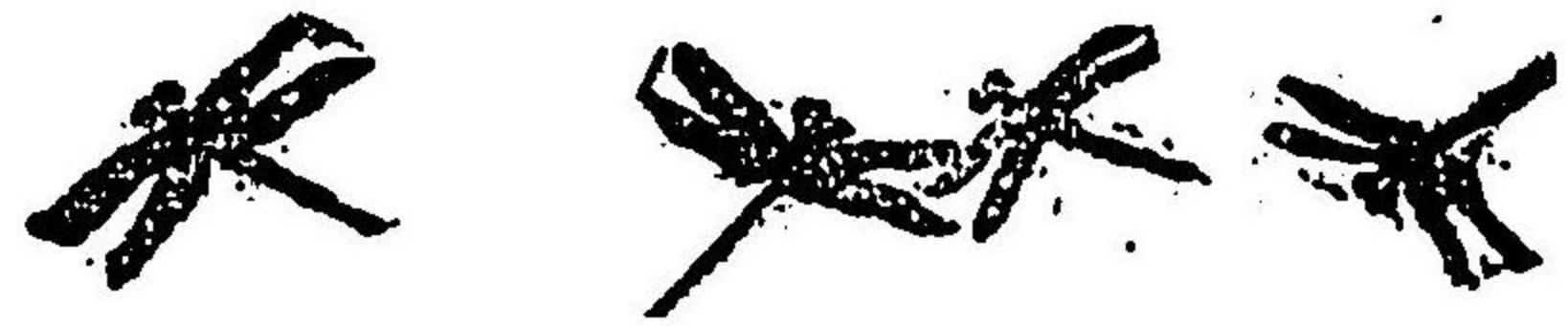
扱もお琴は新しい生活の波と戦ひ續けて早くも五年の年月を長岡に送つた。その五年目のお琴が二十七の五月晴れて麗か

生活の渦巻

十四



ならない。憊う考へたお琴は兎に角に社長と別れねばなるまいと思つた。日蔭者の生活。これにはもう新たに學び知つた其道德の觀念が其身を許さなかつた。



な春の光に照らされ乍ら、お琴は生れ變つた生活を迎へに愈々都へと長岡を發つ事となつた。
 恰度其頃お琴の實の姉で、それまで南傳馬町の羅紗問屋の主人三木某に圖はれて居たお駒と云ふのが急に病死したので、年老いた両親に對する責任が俄かに自分の身一つに懸かることとなつた。この事はお琴の決心を見るに至つた原因であつた。それに社長も東京に残してある愛兒等の追々成長するにつけて、道ならぬ自己の行爲を



漫に後悔して來た時でもあつた。搦て加へて石油起業會社を寶田會社に合併して東京へ歸るやうになつた折柄のこととして、お琴の決心には快く同意した。

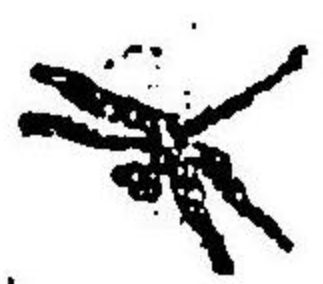
「そうだ私もそう思ふ。決して今からだつて遅くはない——お互にもつと傑れた生活をする人にならう。お前の覺醒は私への教訓であつた。そうだ。寧ろお互に此際別れて了はう、——お前も一度は人間の踏む道を踏んで立派に人と結婚

するが宜いだらう……」

その日も琴は社長に停車場まで送られて、上野
行の急行に乗った。

北國も長い冬の眼から醒めて、青い／＼草原か
らは心地よい雲雀の囀りを清やかな風が運んで
ゐた。

「明後日は私も此地を引拂つて發つから……、御
機嫌よう！」

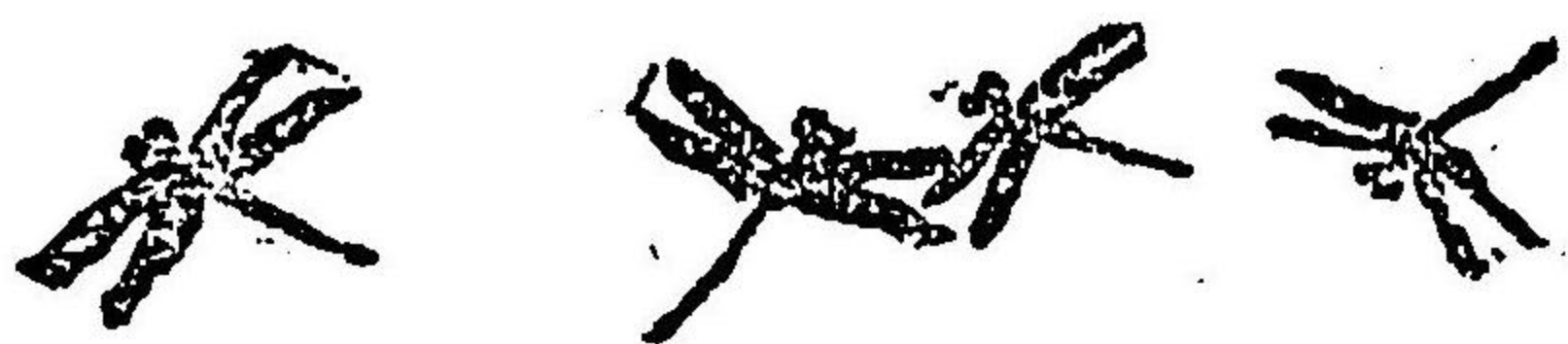


かう云つてプラットホームに立てゐる社長の
姿を、琴は遠去かつて行く汽車の窓から見えな
くなる迄じつと見返つてゐた。

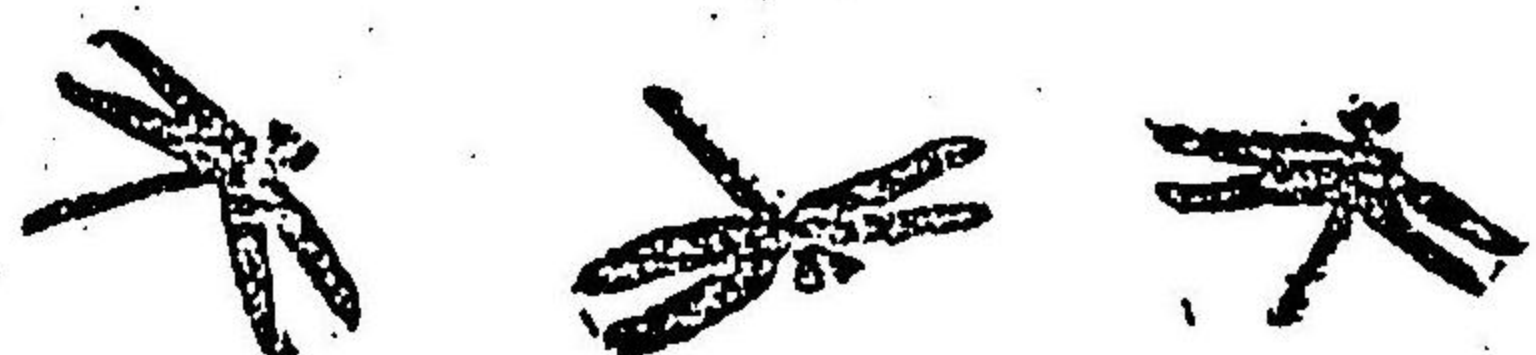
来る時は眞白であつた信州の高原は、今も名も
知れない草花が緑の野を色どつて、崖に咲く右近
櫻の花片が、吹くともない風にひらひらと舞れて
ゐた。

その日の晝頃は、千曲川に添ふて淺間山の裾を
登つてゐた。





麗かな空に、真直に煙が立ち昇るのを、車窓に凭れ乍ら、お琴はなつかしく眺め渡した。畑に在る男や女の頬冠りした白手拭が、晴れた光に際立つて眼に映つた。炭俵を負ふた馬が、河端の青草を餘念もなく喰つてゐた。
 麓に下りて来ると、眼の前に展けた田圃に、蓮華草の花が美しく咲き翻れてゐた。それを掘り返へす鍬の刃が、キラ／＼輝いて見へた。田に在る者畑に在る者は忙しかつた。

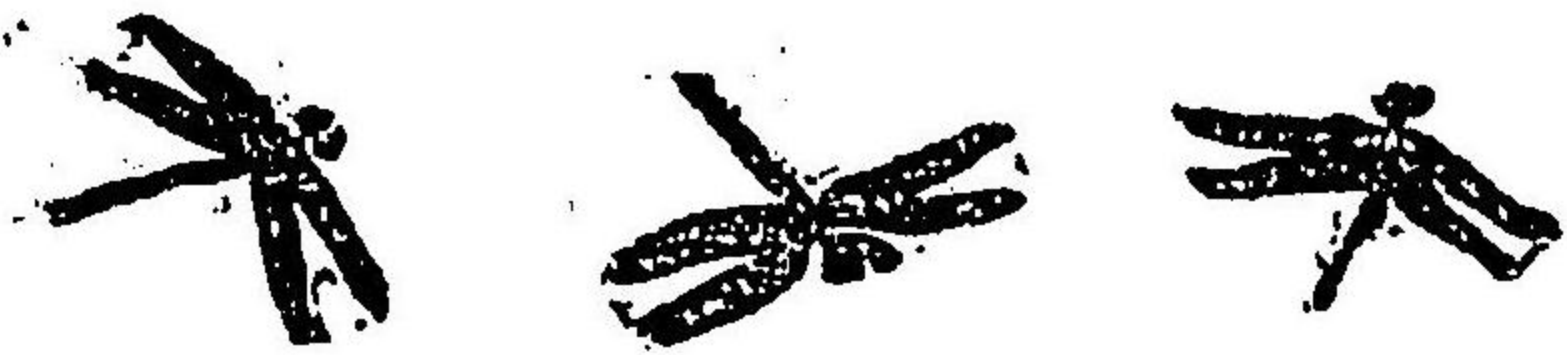


自分もこれから彼の忙しい渦巻の中に歸つて行くのだ。悠う思ふとお琴の心は妙に躍つた。幾年振りて入る都の變化は、妙ならずお琴の眼を歌てしめた。
 上野の構内を出ると、電車が喧しく往き來してゐる。數年都と遠ざかつてゐるうちに、悉り田舎者になつて了つたやうな気がする。物珍らしく賑やかな都會の聲を聞き乍ら、お琴は大工町に住んでゐる父の處へ歸つて行つた。



新らしい生涯は眼の前に開けた。
 永い／＼日蔭者の縛から放たれて、遠かに廣い
 世界に自由の身となつた。心は何がなしに只躍
 つた。
 久しぶりて年老いた父母と相對して、夕飯の膳
 を圍んだ。涙は譯もなく滾れて來た。

明日から自分は此年老いた兩親を脊負つて立
 つのだ。不圖こう心に繰返して、お琴は自ら愕然



とした。怎うして喰はう。怎う云ふ不安が、洪水
 の様に胸を浸して來た。
 お琴は熱心に職業案内の頁を繰つた。偶から
 偶まで読み漁つては考へて見た。けれども遂に
 其本から満足な答は得る事が出来なかつた。
 捜しあぐんで、或る晩町の中をさまよひ歩いた。
 然し猶これぞと思ふ考へも浮ばない。怎うして
 幾夜か只一人歩き乍ら考へてゐるうちに遂に飯
 焚會社を起そうと云ふ考へにつきあつた。



翌くる朝早速自分で深川の米市場へと掛け附けて、米の相場を聞いたり、瓦斯會社へ行つては燃料の費用を調べたりした。そして米の搗場や飯の焚き場、飯櫃から配達車の調製の費用迄も見積りをして見た。経費は少くも千五百圓から二千圓を數へなければならなかつた。自分の所持金の六百やそこの金では如何にもならなかつた。折角考へ附いた計畫も今は棄て、了はねばならなかつた。



お琴は六百や七百の金が何を爲すにも足らぬのを知つて今更の様に失望して了つた。窓から覗いた人生をのみ見てゐたお琴の胸に、どんなに大きく生活の渦巻く波の響が聞かれたであつたらう。

お琴の胸裡には、ひとり不安の波が起伏した。此時までに、お琴は悉り考へ勞れて棄鉢になつた。恰度その時のことであつた。堀田子爵に呼

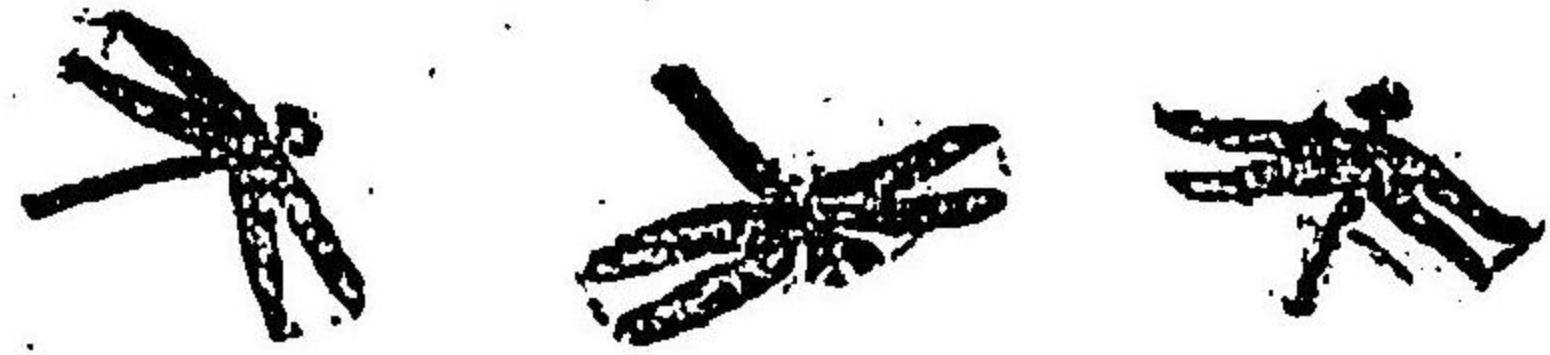


れた。自分が親許になるから、小石川の或男爵の處に嫁いては怎うか。慙う云つて、男爵と云ふ人の事を語つてくれた。

淺草に住む或る伯爵の弟に生れ、三四年前分家して新たに男爵を授けられた華胄の俊才であつた。容貌望みて、是非にと云ふ懇望であつた。

お琴の心は迷つた。

お琴は一人二階に上つて考へた。泉の湧くやうに、彼の製藥會社社長が長岡で別れる時に、自分に

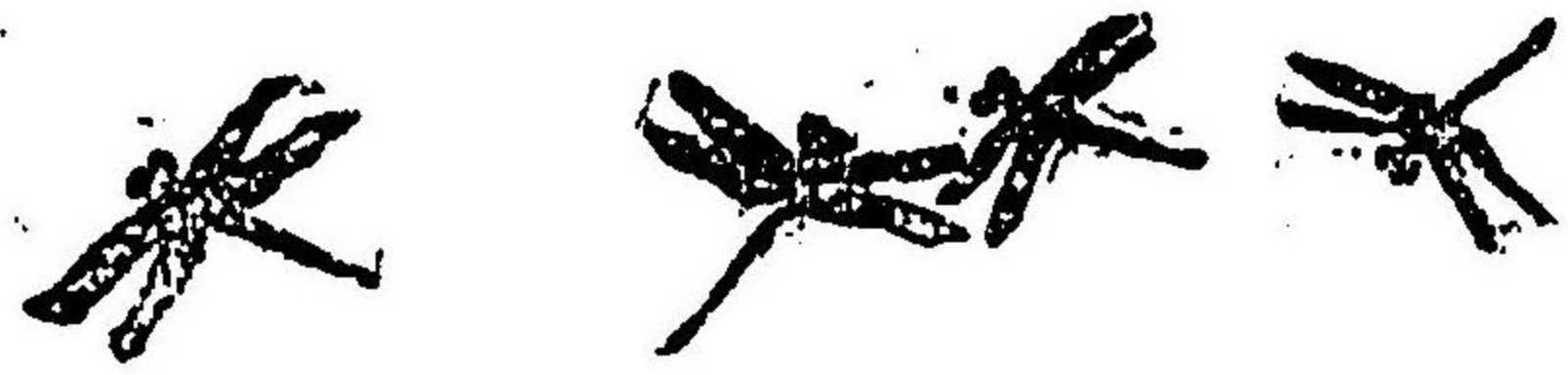


語つた言葉を思ひ出した。

「お前も立派に嫁入して、一度は人間の踏む道を踏め」

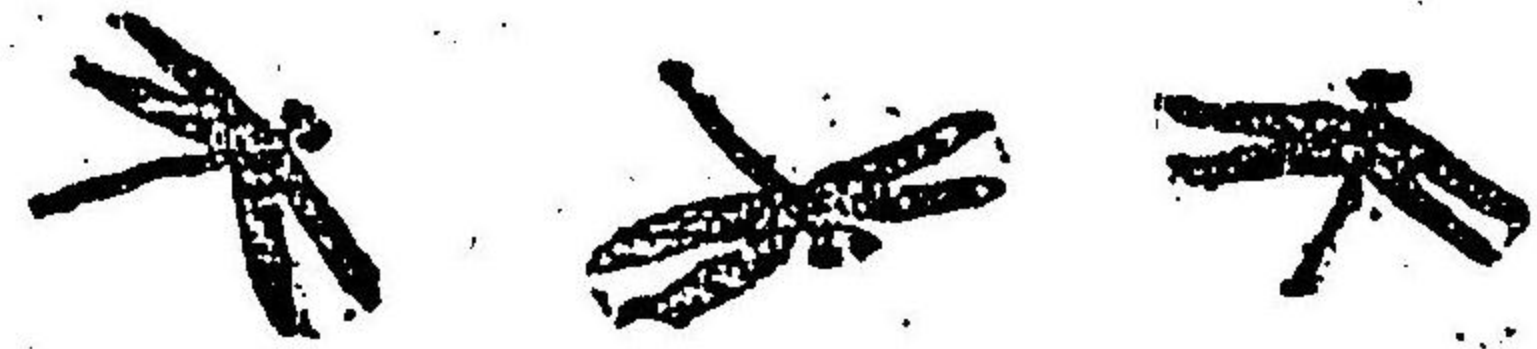
お琴は此言葉に心を惹かれた。慙いに先の見えぬ仕事に手を出して、煙の中を歩くやうな路を渉るよりも、身分ある人に縁附いて、地道に暮すのが萬全の道だ。慙う心が囁いた。

さうした考の中に、お琴は明くる日早速子爵の處へ承諾した旨を云ひ送つた。



話は早かつた。間もなく立派な結納が運ばれた。黄道吉日を撰んで、婚禮の日取りも決つた。やがて男爵家から支度の着物が届いた。立派な着物を前に置いて、お琴は急に晴れやかな若々しい羞みを覺えずに居られなかつた。お琴は生れて初めて、慙うした清らかな處女らしい心のとさめさを感じた。

待つとはないが、何がなし其日ばかりが心を充いに占領して、まんじりともせず、明すことも



幾夜かあつた。斯くて愈その日が来た。

譯もなく心は忙しかつた。

早朝から男爵家や堀田子爵家の使が引も切らずにやつて来た。

お琴は急ぎ立てられて、両親と一緒に朝飯の膳についた。

「もう慙うして、お前と一緒に御飯を喰べるのもこれ限りだねえ、今夜から寧ろしくなる」



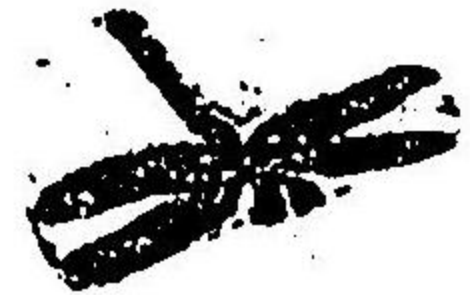
母は恚う云つた泣然とした。急には箸も執れ相もなかつた。

これを睨めてゐたお琴は愕然とした。忘れたてゝゐた心の響が俄かに聞えて來た。年老いた兩親に此察しい思をさせて自分ばかりが出世したとて怎ならう。

お琴の心は遽かに一變した。

「一寸行つて來ます」

こう云つて箸を抛げ出すと、其儘家を飛び出し



て堀田家へ駈けつけた。

「馬鹿を云つちや困るなア今更其麼ことを云つてどうするんだ」

「どうするツたつて爲方ありませんもの」

お琴は泰然たるものであつた。

「そんならよう御座んす。私が先方へ行つて斷つて來ますから」

驚き呆れる子爵家を飛び出して、自身で小石川に御殿の男爵を訪れた。



た。あゝ自分は今もう一生あの社長の云つた「人間の一度は踏むべき道」を踏む事は出来ないのか。かう思ふと涙はまた止め度も無く翻れて来た。



「……………ですから何卒悪しからず」と最後の言葉を云ふなり起つて歸つた。男爵は何が何やら解らず煙に巻かれたやうに呆然とした儘で出て行くも琴の後姿を歪と眺めて居た。

男爵の温乎たる風采、燦やかな其邸宅——歸つて来たも琴の胸に此印象ばかりはいつまでも際立つて残つて居た。

も琴は熱い——涙が潸々と満顔に懸るに任せ



十五

左様なら

お琴がさまざまに迷つた心にふと思ひ出したのは、佛蘭西の富豪カーンの事である。先年カーンが日本に來た折に申戯か眞面目か是非佛蘭西



へ一しよに行かぬかと云はれた事があつた。さかぬ氣のお琴は如何でもつれて行つて下さいと云つて只管其氣になつて居たが年老つた父母が遂に許さぬので折角氣込んだ希望も果たす事が出来なかつた。お琴は丁度今それを思ひ出した。前途に何の望みも無い日本に居て只くよくとあじさな日を送つて暮すよりも寧ろ此際あの佛蘭西へ渡つて天晴れ一かどの女優になり度い。かうつく／＼考へた。

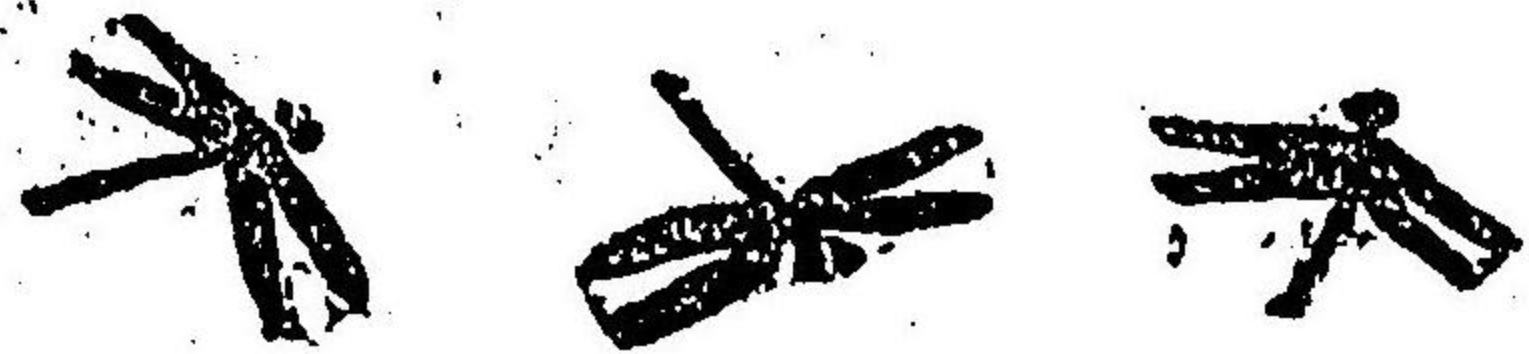


そう思ふと矢も楯も堪らなくなつた。豫て新橋に出て居た頃、最負の厚かつた——殊にカーンと一しよに佛蘭西行を勤めて呉れた伊藤公を久しぶりて訪つれた。

「ねえ、御前さん、後生ですから佛蘭西へ遣つて下さいな」

お琴はかう云つて哀願するやうな眼を動かした。

「如何したのだ。おぬしは出し抜けにそんな事



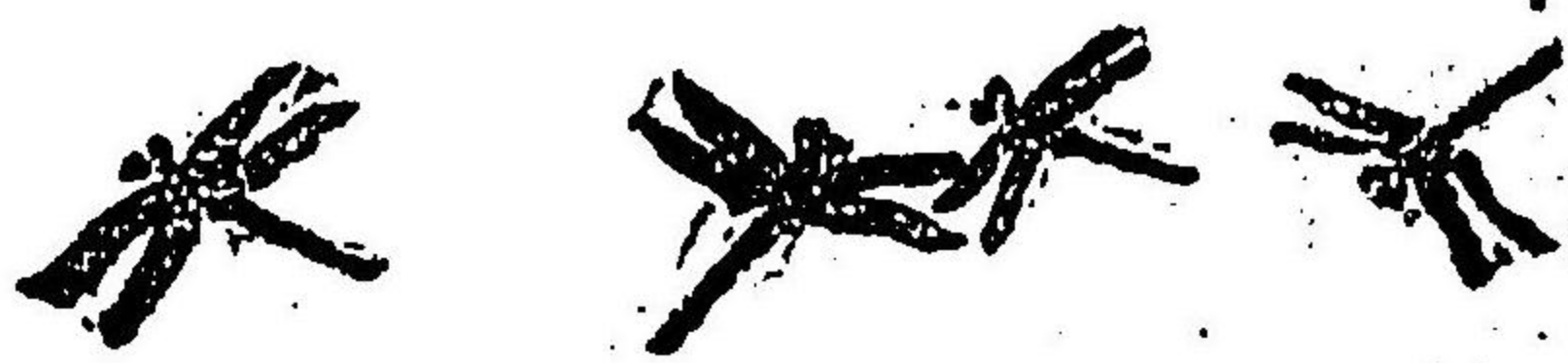
を云ひ出して」

公は只笑つて居た。

「何でもよう御座すから、何卒後生ですから」

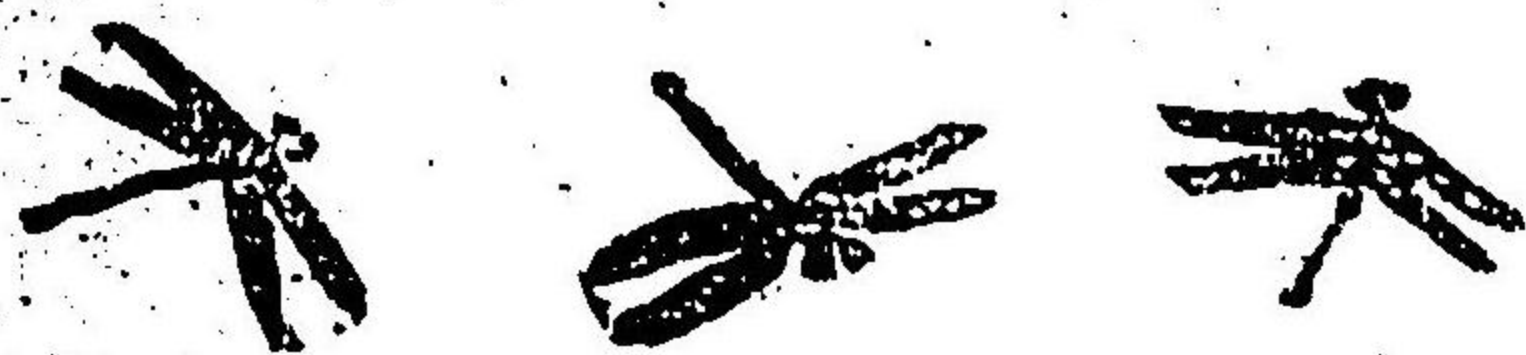
お琴は何一つ慰めもない昨今の其身の境涯を包まずに打ち明けて語つた。

「佛蘭西へ行つたからつて、如何なるものでもない。そんな事を云はんで、唐物屋でも初める。おぬしが眞面目にやるつもりなら、五年間に十萬圓の金は屹度儲けさせて遣る」



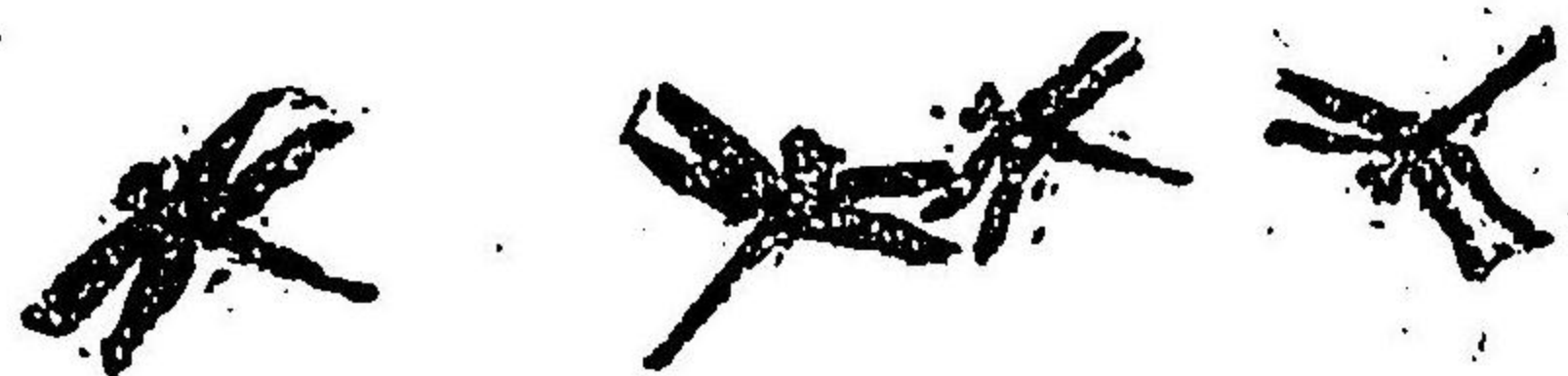
公はかう眞身になつて説諭して呉れた。お琴も始めは、云ひ出した事を微さずには置かないと云ふ氣で重ねて冗く願つて見たが、公は如何しても佛蘭西行の話には乗つて呉れない。何でも唐物屋を始めろ。かう云つて意見するばかりであつた。

お琴も遂に我を折つた。そんなら一つ唐物屋をやつて見ようか。やがてかう心を決めたのはそれから久しい後では無かつた。



その年も早暮れに押し迫つた十二月の二十日、銀座二丁目は明治屋の眞向に、二間半の間口の店を借り受けて、愈々唐物屋を開店した。家號は琴玉堂。それはお琴の本名の「琴」の字と、其前の藝名の玉代の「玉」の字を取つて、伊藤公が命名して呉れた名であつた。

店を開けるまでの萬端の世話は、元より伊藤公の腕煎で、資本は亡くなつた姉の旦那であつた三



木が大部分出して呉れた。
 丁度旅順陥落の情報が頻りに傳へらるゝ頃の
 事であつた。伊藤公の多忙は言語に絶して居た。
 連日連夜靈南坂の官邸には元老等が集つて密議
 を凝した。かう云ふ問にあつても公はよく琴玉
 堂へ電話を掛けた。

何と何と、何と今直に持つて来いと云つて呼び
 出しを掛けてやる事もあれば態々馬車を廻して
 やつて此馬車に乗つて今から直に商品の籠を脊



負つて来いと云つてやる事もあつた。

お琴は其馬車に乗つて出掛けて行くと、公は態
 々玄關口まで出迎へた。

「あ、よく来た、さア入れ。籠は私が持
 つて行く」

かう云つて自ら重い籠を提げて座敷に通る。

山縣公や井上侯の並んで居る前に運んで行くに
 も、態々醒興て人手を借らなかつた。

「唐物屋で御座い、何を如何様で」



公はかう聲色を使つて座敷中を歩き廻つた。

「買はう〜」

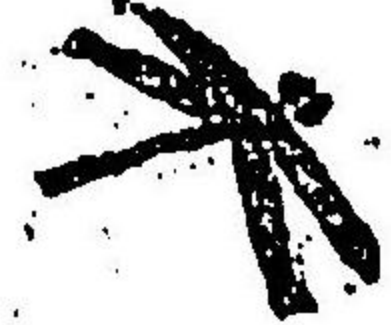
元老等は寄つて集つて争つて買った。籠は直
瞬く間に空になる事が多かつた。

時には公は數百金を投げ出して、

「あゝ、其籠毎買ったよ」

と買ひ占めて仕舞ふ事もあつた。

お琴が歸ろうとすると又一しよに馬車に乗せ
て銀座の店まで態々送つて來て呉れる事もあつ



た。

銀座の往來には大抵店へ寄つて呉れた。態々
馬車を店先きに附けて何かと思へば、

「人形の頸が横になつて居るから直して置けよ」
など、注意して行く事も度々であつた。

「伊藤さんの唐物屋」と云ふ評判が立つた。琴

玉堂の名を知らぬものも、「伊藤さんの唐物屋」

とさへ云へば直にあれかと首肯いた。中には、

「伊藤さんの唐物屋さん此方様で御座います



か
と云つて訪ねて来る客もあつた。
其定得意とも云ふべき顔振の中には故兒玉伯
堀田子、三島子。大倉氏等を始め貴族院——殊
に研究会連中の誰彼又三井、正金、二十の各銀
行の重役等が常に見えた。
仕舞にはかう云ふ人々が辨當を食ひに毎日詰
め掛けて来る様になつた。其頃はもう宛然たる
社交機關の俱樂部であつた。



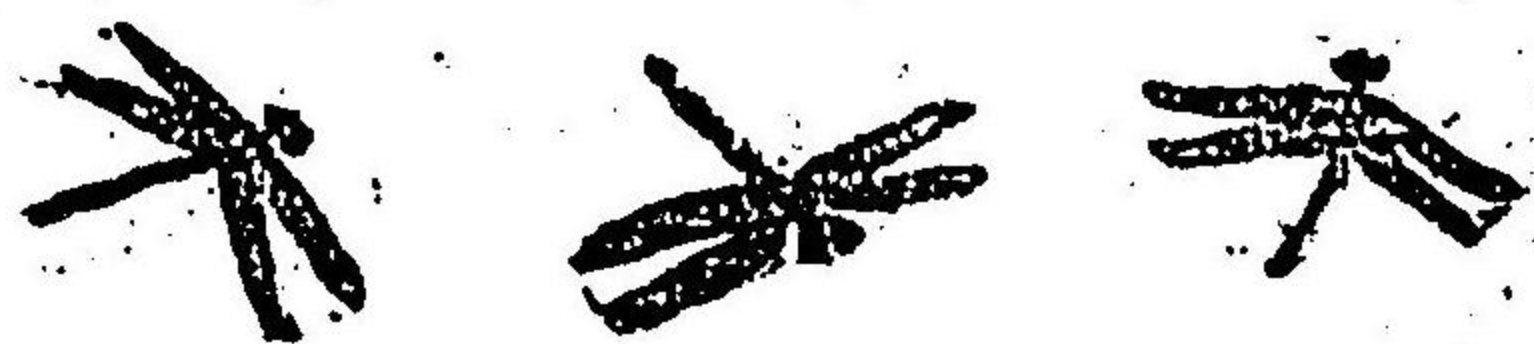
お琴は今は總ての煩ひを忘れ去つてしまつた。
希望の光のみが其前途に輝いて居る様に見えた。
靈南坂の官邸に召さるゝ事は日増しに繁くな
つた。官邸にしんめりと開く長夜の宴に侍して
公が淺酌の相手をしながら夜を明して返る事も
多かつた。
元老等の密議は夜半の一時二時より早く終へ
る事は稀れてあつた。それから先きは屹度酒に
なつて碁が始まつた。曉方の三時か四時兎もす



れば六時か七時で無ければ宴は果てなかつた。
眞に長夜の宴である。

お琴はいつもそれまでは止めて置かれた。公
がザル恭の相手を仰せ附かる夜も少くはな
かつた。

或る麗かな日——それは三十八年の四月も
う末近い頃の事であつた。お琴が店の子僧を相
手に店先に坐つて居ると、チリン／＼と忙しく電



話が鳴る。烏森の待合榊田屋の女將お筆から
ある。

何事かと思ひ乍ら話を聞いた。伊藤公は今箱
根の環翠樓に居る。今から直にあなを連れて
来て貰ひ度いと云ふ電報が懸つて来た。今から
直で無ければ汽車の間には合はぬ。是非大急ぎ
で仕度をして、新橋停車場に馳け附けて貰ひ度
かう云ふのである。

お琴は取り敢えず、そこ／＼に身仕度して新橋



に向つた。其處にはお筆が待ちあぐねて居た。
 長閑な春の光は汽車の窓から美しく流れ込ん
 だ。藍をたぐえた様な相模灘の海が窓から左に
 磯馴松の枝越しに見えて来たと思ふと早くも國
 府津の停車場に着いた。

お琴はお筆と並んで、プラットホームを出やう
 とした。

「玉代、玉代」

不意に呼び掛ける人がある。お琴は發と思ひ



乍ら振り返つた。

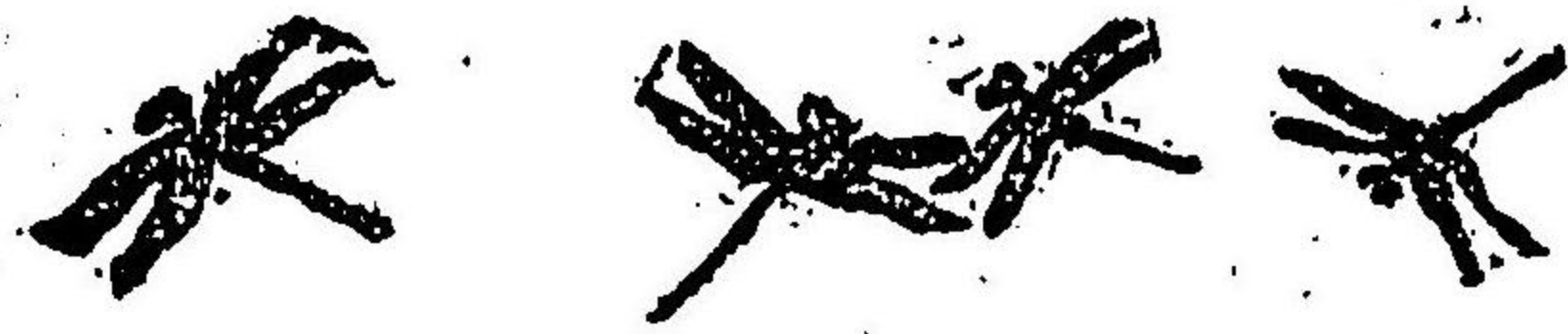
「あッ」と思はず叫んだ。

聲を掛けた人は誰あるう。絶えて久しい文書
 學士であつた。

「大分澄して行くぢやないか」

文書學士はかう云ひ乍ら足を止めたが今から
 汽車に乗ろうとするらしく何となく忙し相であ
 つた。

「まア暫らく御機嫌よう」



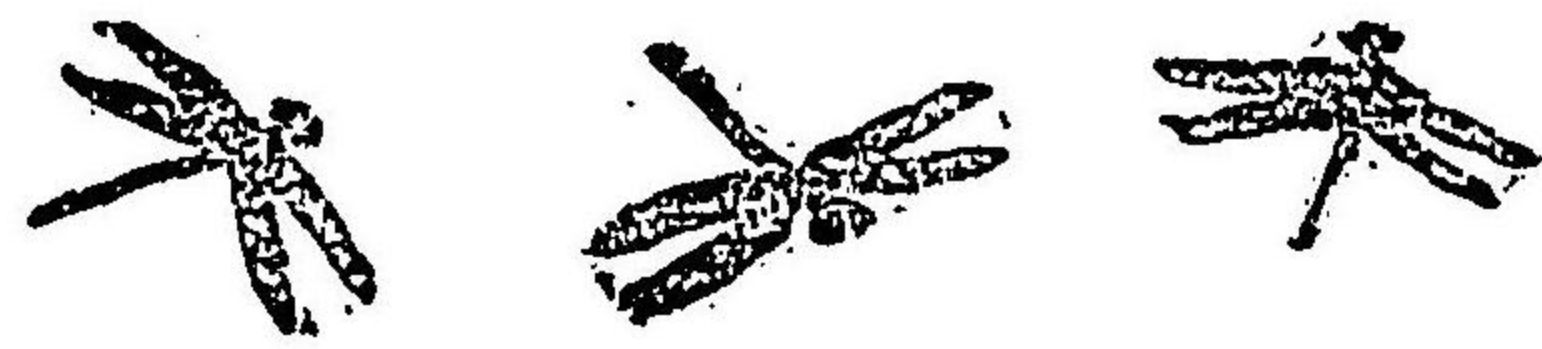
お筆はお琴が呆氣に取られて居るのを見て、傍から彼に挨拶した。

「あ、お前も一しよか」彼は微笑した。「何處へ行くんだね」

「塔の澤の環翠樓へ参りますの。あなた御一しよにいらつしやいませんか」

「なアに僕は今箱根から歸る處なんだ」一寸笑つて、「それに待つてる人があるんだらうから」

彼は少し皮肉に云つた。



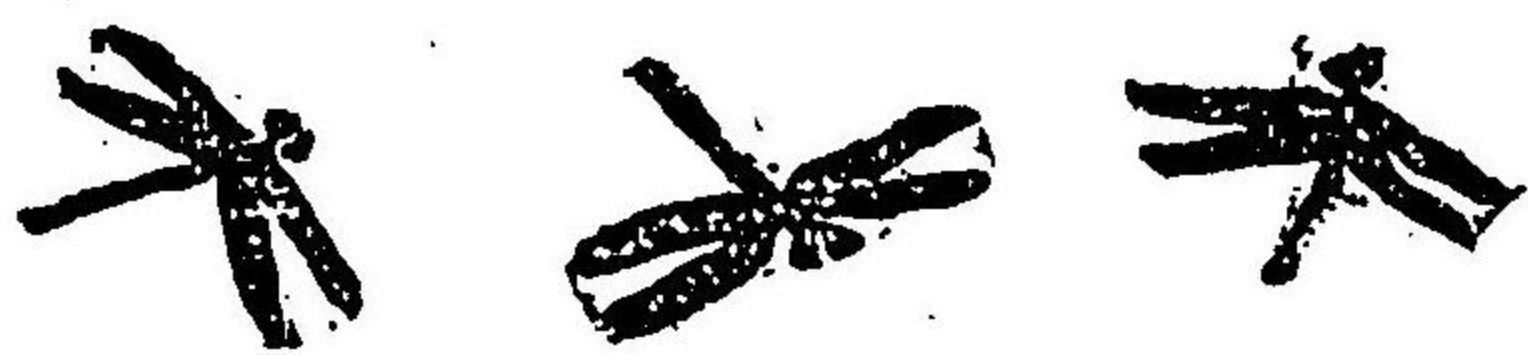
「あら、あんな事有仰つて眞實に二人きりなんですよ。あなた引返しちやア如何ですの」

お琴は強ちお世辭ばかりでは無かつた。

「馬鹿云へ待つてる人が無い事があるもんか。左様なら」

彼はかう云ふと其儘、すた／＼と行つて了つた。

環翠樓へ着いて見ると伊藤公は「随分待つたぞ」と云つて莞爾して居た。



藝名の玉代の「玉」を取って読み込んだ事は、お琴にも直解つた。

あゝ「昔をぞ思ふ」——お琴は自分の胸の中を云ひ當てられた様に思つた。さまざまな昔の事が思ひ出される。取り止めの無い事が走馬燈の様に頭の中に映つては消える……

「何だ何處から来たのだ」

伊藤公はかう云つて答めた。お琴は其葉書を急いで懐へ入れ様とした。

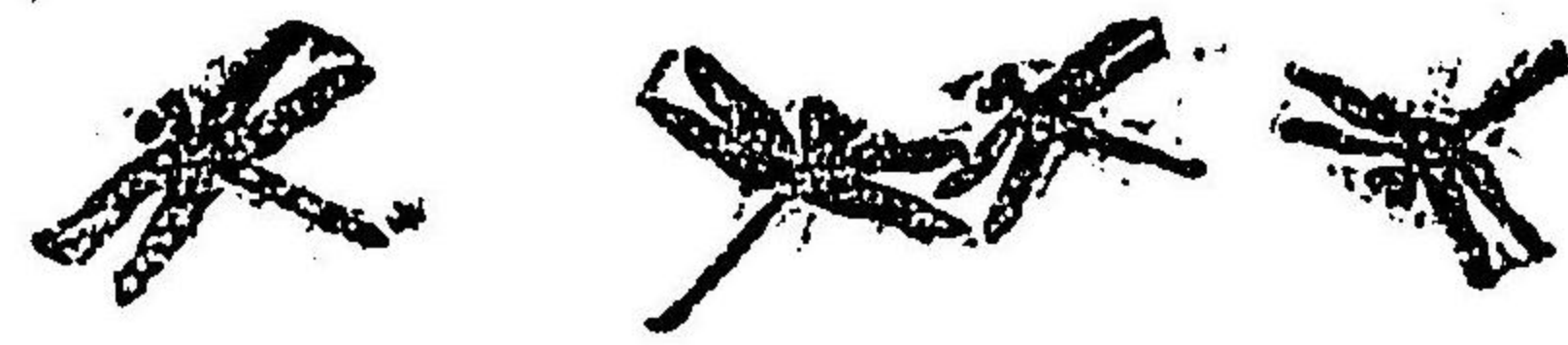


「玉代さんと有仰るのは貴婦ですか」

女中はハガキを一枚持つて来て置いて行つた。差出人は文書學士。鉛筆で走り書きしてある。國府津の停車場で、先刻あの後から直に投函したものでらしい。

文言は一行も書いて無い。只一首の歌である。初戀に筆の命毛つゞくまで玉づる書きしむかしをぞ思ふ

かう書いてある。お筆の「筆」と、お琴が前の



「いゝぢやないか見せるよ」

と葉書は遂に公に取られて了つた。お琴は差出人の名を明さずには居られなかつた。

公は少しも驚かなかつた。毛程も悪い顔はしなかつた。そんなら直に彼を呼べと取り敢えず東京へ宛てゝ急電を發した。

文書學士は間もなく箱根へやつて來た。只今來た處だが今から伺つてもいゝかと先づ公の許に女中を聞きに寄越した。公は首肯さ乍ら硯を



引き寄せてすらくと書き流した。

くやしいわけだよ貧乏なわたし何ても喰ふ

かと人が云ふ

是れにて此場の御判断を乞ふ

かう書いてお琴に渡した。

「これを彼れん許へ持つて行け」

お琴は取引上の事て茅場町の藤本ビルフロアへ足繁く出入りする様になつた。そうする

中に不圖した事から其處の支配人の佐藤貞治郎に迷ひ込んだ。これが元で細かな商賣をして居るのが遂厭になつた。

お琴はもう面倒臭いと云ふ腹であつた。直に店を畳んで了つて俄かに株屋になり濟した。初める早々福運が向いて一舉にして百萬に近い金を儲けた。けれども運命の手は何處までもお琴を平な道に置いては呉れなかつた。間も無い頃あの株式の暴落があつた。お琴は成金の絶

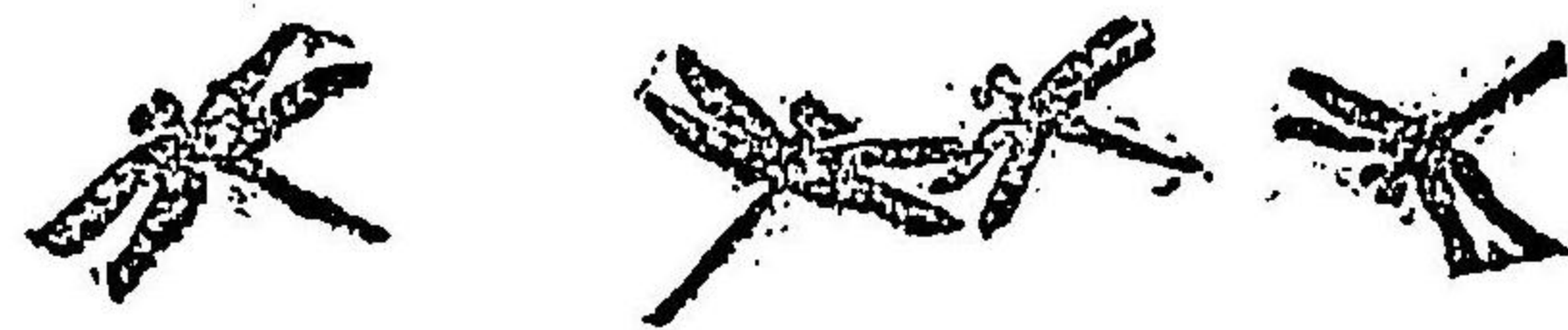
頂から瞬く間にどん底へ投げ落された。

一寸した事からやがて又佐藤と衝突した。其揚句は別れ話になつてぶつくりと縁を断つてしまつた。山下町に獨力で今の待合「とんぼ」を開く様になつたのはそれから眞の間も無い後の事であつた。

水のままに流れて來た萍は、狭い峽を走つた



告げた。



り、深い湖に淀んだりした。時としては、花の咲き溢れた野を過るかと思ふと、直に又暗い林の中を過ぐる様な事もあつた。かうして何時となく廣い湖に出た。

口無し沼で無い限りは、又此廣い水溜を出て、永い旅に出で行かぬものとも限らない。

男にはもう凝り／＼した。女の身てはあるけれど、腕一本で遣り徹して見よう。憊う云ふ意氣込みを持つて、お琴は其前半生に『サヨナラ』を

明治四拾五年六月廿八日印刷
明治四拾五年七月一日發行

不許複製

實價金五拾錢

著者	鈴木秋風
發行者	東京市四谷區永住町二番地 鹿鹽龜吉
印刷者	東京市京橋區西紺屋町廿七番地 勝亦省三
印刷所	東京市京橋區西紺屋町廿七番地 株式會社秀英舍

市內大賣捌

東京堂、至誠堂、北隆館、林平、上田屋

東海堂、前川、大川屋、富文館

地方大賣捌

(名古屋)川瀬(京都)東枝律(大坂)吉岡

寶文館○福晉社○盛文館

(久留米)菊竹(函館)大盛堂(臺北)新高

堂(朝鮮)日韓書房(大連)大坂屋

東京市四谷區永住町二番地

發兌元 彩文館 **スミヤ書店**

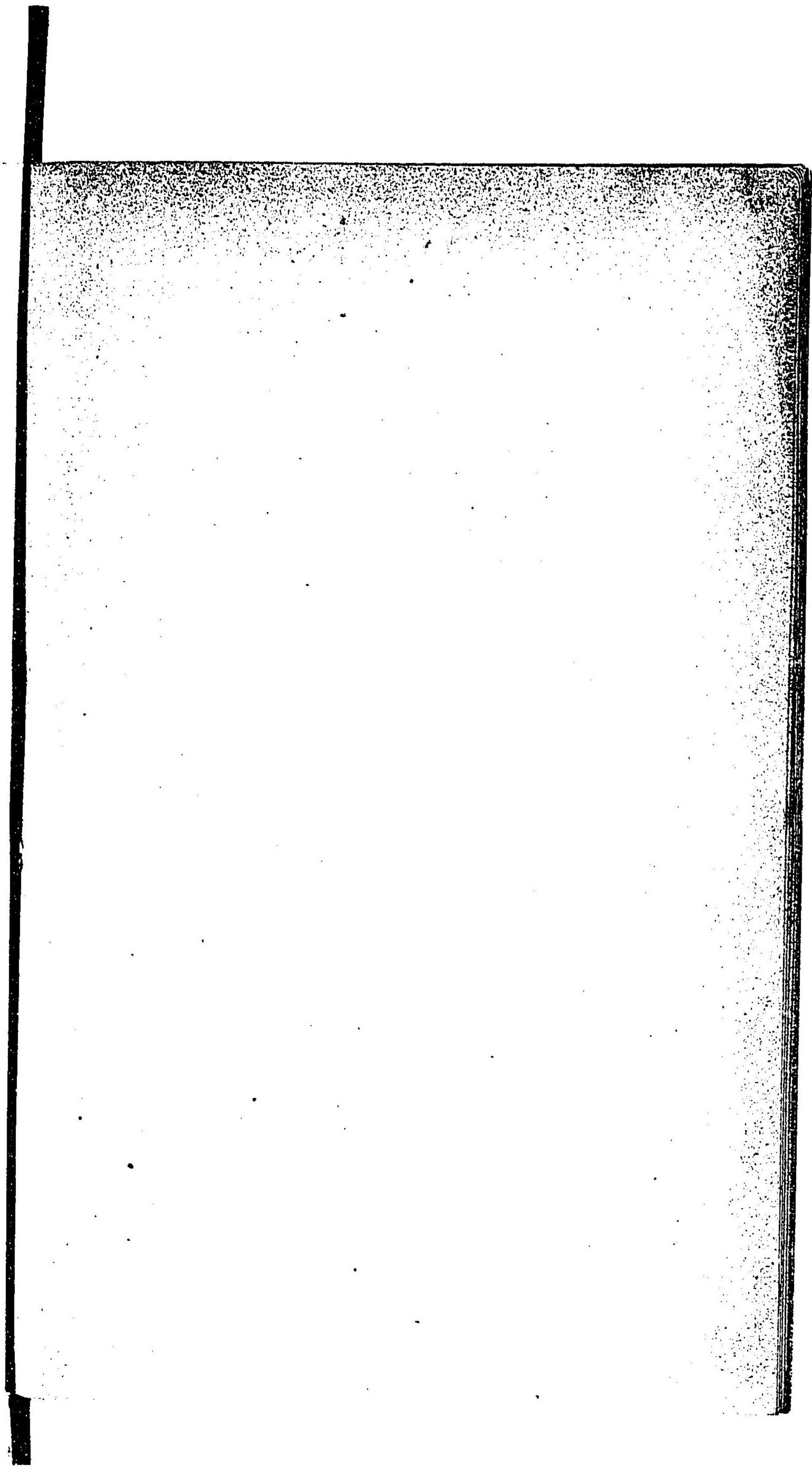
東京市京橋區築地二丁目十五番地

代市 理店內 **粗山書店**

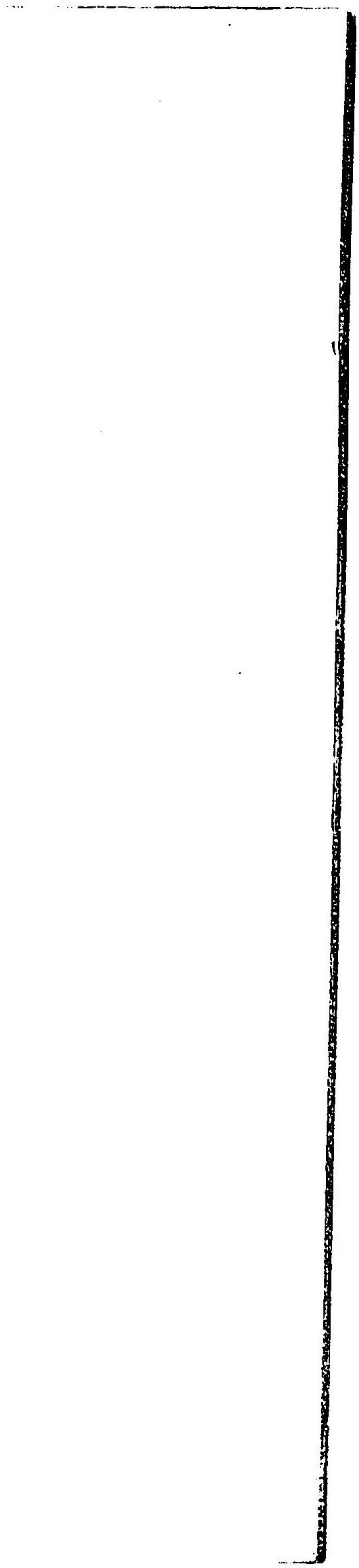
東京市下谷區下平右衛門町九番地

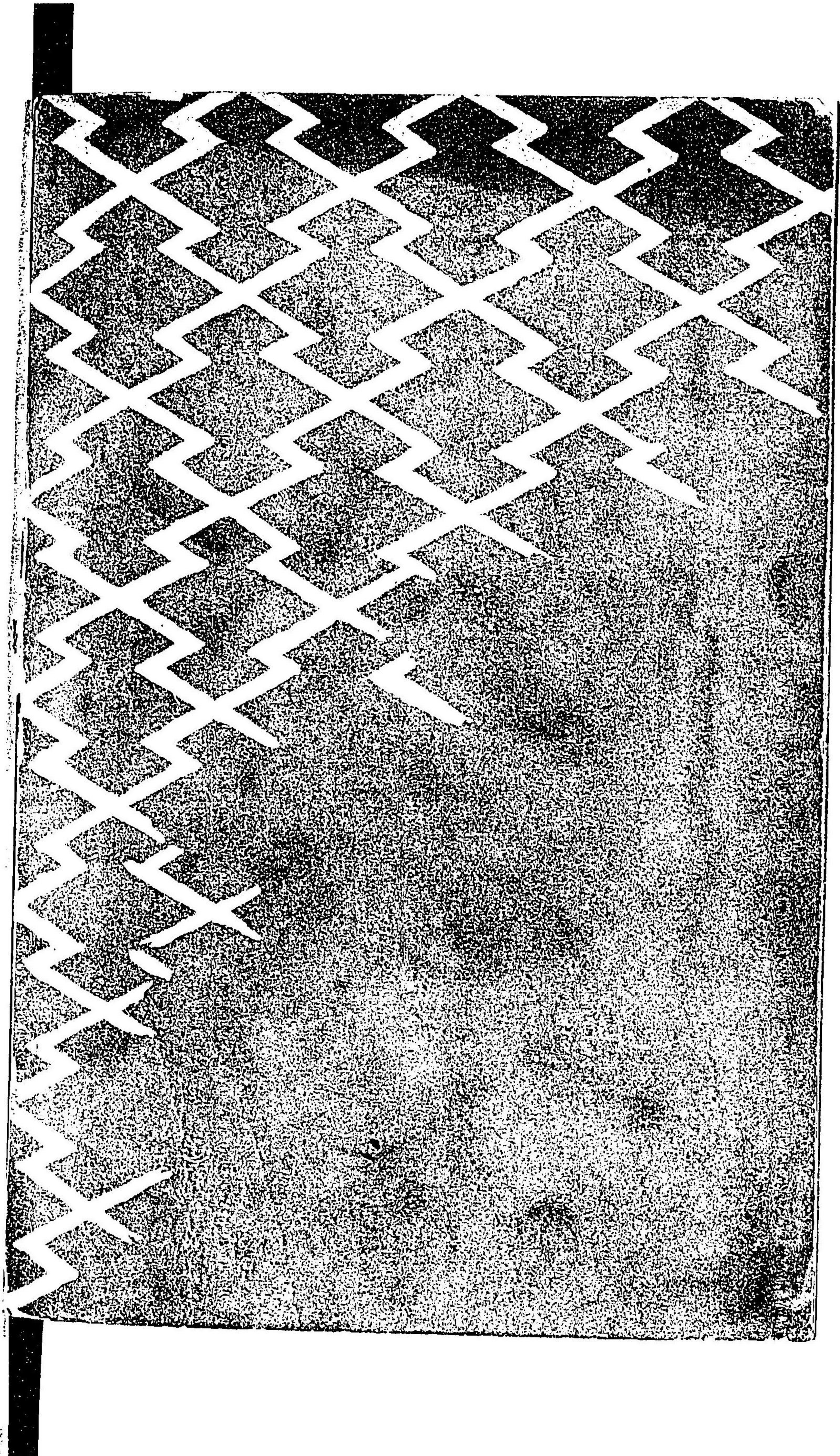
同 **岡村書店**

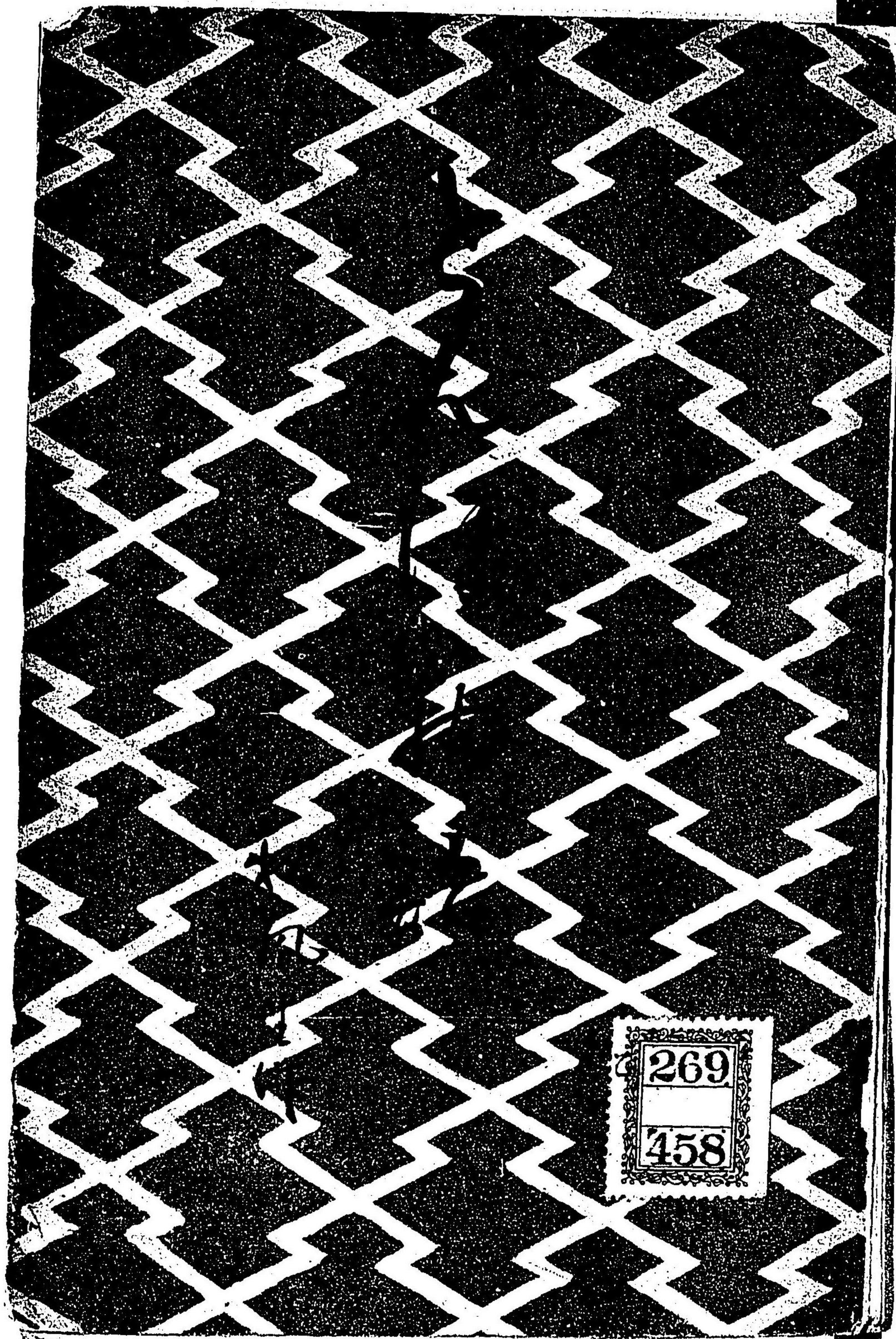
(電話下谷四二〇四)



269
458







094743-000-5

特13-200

とんぼ物語

鈴木 秋風 / 著

M45

DBQ-2305

